

ドイツ地理学におけるラントシャフト論の展開

手塚 章

- | | |
|----------------------------------|---|
| I はじめに | III-4 ヘットナー、ヴァイベルおよびビュー
ルガーのラントシャフト論 |
| II 第1次大戦前のドイツ地理学におけるラン
トシャフト論 | IV 第2次大戦後の動向 |
| III 両大戦間期におけるラントシャフト論の展
開 | IV-1 ドイツ地理学におけるラントシャフ
ト概念の確立と普及 |
| III-1 パッサルゲのラントシャフト論 | IV-2 ラントシャフト論批判の展開 |
| III-2 パンゼのラントシャフト論 | IV-3 近年の動向 |
| III-3 文化景観研究の発展 | V 結 論 |

I はじめに

今世紀のドイツ地理学の方法論的展開を特徴づける理論概念として、バルテルスはラントシャフトと社会地理学をあげている¹⁾。ドイツ地理学にとって、社会地理学が比較的新しいアプローチの仕方であったのに対して、ラントシャフトをめぐる議論は、今世紀の初めから一貫してみられた地理学方法論上の主要テーマだったと言える。まさに、「ラントシャフト」という言葉は、ドイツ地理学の中で2世代から3世代にわたって、地理学の中心理念をめぐる理論的検討や、学問的自己認識の中核に関する議論の中心に位置してきた²⁾のであり、ラントシャフトほど継続的に注目を集めてきた概念は他にみられない。近年においても、ラントシャフト概念の有効性に対する若手地理学者の批判をきっかけとして、1970年前後から活発な論戦が展開されてきた。それゆえ、地理学でのラントシャフト概念を直接、間接に検討した文献は、枚挙にいとまのないほど存在する³⁾。

わが国においても、ラントシャフト概念に関する考察は、古くから数多くの研究者によってなされてきた。ラントシャフトに対しては、景観、景域、地域など、それぞれの研究者の解釈に応じてさまざまな訳語が当てられてきたし、そのために生じた用語法上の混乱は現在にいたるまで完全に整理されてはいない⁴⁾。

もともと、ラントシャフトという語自体が、数多くの異なった意味で用いられる語である。地理学でのラントシャフトの概念規定が研究者によりその内容を異にしたり、さらには同じ研究者であっても、同一の文章の中でラントシャフトという言葉複数の意味に用いる場合があるなど、用語法上の不明確さは、ドイツにおいてすらラントシャフトという語に常につきまとう問題である。個々の研究者のラントシャフト概念を検討する前に、以下では簡条書きの形でこの言葉の多義性をまず示しておくことにしたい。

シュミットヒューゼンは、一般用語としてのラントシャフトが意味する内容のうち、主要なものと

して次の9種類を区別している⁵⁾。(1)芸術上での土地空間の絵画的表現。(2)地表環境の感覚的印象。(3)土地空間の外的現象形態(相観)。(4)土地空間の自然的環境。(5)土地空間の文化的特性。(6)土地空間の一般的性格。(7)限定された土地空間。(8)政治的、法律的な団体もしくは組織体。(9)特定の対象物の分布領域。ちなみに、地理学におけるラントシャフト概念に対応するものとして、シュミットヒューゼンは第6番目の用法(土地空間の一般的性格)を指摘した。

しかし、地理学におけるラントシャフトの概念は、シュミットヒューゼンが主張するほどには、明確な形で研究者相互間の合意が達成されているわけではない。むしろ、日常用語としてのラントシャフトの多義性は、地理学用語、ひいては一般に科学的用語として用いられる際のラントシャフトの意味をも、きわめて複雑なものにしているのが現状であろう。それぞれの時期に、それぞれの研究者によって主張されたラントシャフト概念の内容を、ハルトは次のように整理している⁶⁾。

- (1) 一定の広がりをもち、一定の印象や感情をともなう自然の区画。ある地点から一望することができる。この意味でのラントシャフトが印象づけられるような自然の区画。
- (2) 知覚の総体。ふつう「相観」という言葉で表わされる。すなわち、ある場所(多くの場合「メソ」もしくは「地域」スケールでの土地空間)における可視的物体の総体あるいは「形態像」。
- (2a) ラントシャフト(1)あるいはラントシャフト(2)の意味における知覚の総体もしくは形態像が、類似の特性を示すような地表の一区画。
- (3) 空間的に共存するものすべての総体。(視覚的に把握できる、できないにかかわらず)地表の一区画内に存在するものの総体。
- (4) 特定のスケールでの地表の区画。この意味でのラントシャフトの大きさは、国(ベルーの129万km²や西ドイツの25万km²)と市町村(1~100km²)の中間あたりに位置する。
- (5) 空間的パターン。すなわち、地表(もしくはその一区画)の2次元的立地モデル。とりわけ、人間や財や情報の流動など、人文事象の立地モデル。
- (6) 地表の生態系(エコシステム)。自然科学的、生態学的なこのラントシャフト概念においては、自然の諸要素(およびそれら相互間の関係)のシステムが問題とされる。
- (7) 生物(個体であれ、個体群であれ、群集であれ)の生態学的環境。生物にとって意味のある環境要素の総体。
- (8) 人間集団をとりまく自然環境(物理・生物環境)。
- (9) ある区域にみられる歴史的に不変な「構造」と伝統の総体(自然や集落構造から、政治、社会制度、さらには特定のメンタリティーにまでおよぶ)。
- (9a) 類似の歴史的伝統が存在し、作用している領域。ラントシャフト(4)の特殊ケースとしてとらえることができる。
- (10) コミュニケーション障壁の存在などにより、空間的に分断された社会関係ネットワーク。ラントシャフト(5)の一種としてとらえることもできる。
- (11) 何らかの現象領域に属する現象の総体。そこでの現象領域は内容が複雑で、多くの場合容易に把握できない多面的なものとみなされる。たとえば、ボンの政治的ラントシャフト。

これらのラントシャフト概念のうち、(2)、(2a)、(3)、(4)、(5)、(6)、(8)は、今世紀のドイツ地理学でそれぞれ大きな役割を果たしたラントシャフト概念であるとハルトは指摘している。

このようなラントシャフト概念の多様性をうまく表現しうる日本語は、少なくともこれまでのところ存在しない。ラントシャフト(1)および(2)に対しては景観、(2a)に対しては景域、(3)や(4)に対しては地域、(6)、(7)、(8)に対しては環境とか風土という言葉がすぐ思い浮かぶものの、いずれもその概念内容の範囲はラントシャフトのそれと一部分しか重なり合わない。したがって、すべての場合に通用するようなラントシャフトの適切な訳語を求めることは、初めから無理な要求とも言える。

しかし、本論文で地理学におけるラントシャフト概念を吟味するのは、単にその多様な概念内容を個別に検討するためではない。ラントシャフトという言葉で表現される概念内容を検討することは、単なる語義解釈の問題にとどまらず、多くの場合、地理学の本質をどう考えるかという問題に直結しており、きわめて大きな理論的問題を含んでいる。ラントシャフト概念の多義性は、現在に限らず、今世紀のドイツ地理学でつねに認められた事実であった。いつの時期においても、ラントシャフトの概念内容は、研究者の立場に応じて微妙な違いをみせつつ、きわめて多方面にわたっている。しかし、一方で、時代の進展にともなって、強調点の変化や部分的な合意の形成など、時の流れを反映した動きがみられることも事実である。ドイツ地理学の内部で独自の発展をみせたラントシャフト概念の展開をあとづけてみると、そこにはおのずからドイツ地理学の大きな流れが感じられるように思われる。

以下では、このような点を念頭におきつつ、今世紀におけるドイツ地理学でのラントシャフト論の展開を、主として両大戦間期と第2次大戦後の2時期に焦点をあてて、そのアウトラインを整理した。大きすぎる課題に対して、以下の記述ははなはだ不十分なスケッチ的考察を提供しているにすぎないが、このような作業を通じて(1)地理学におけるさまざまなラントシャフト概念の系譜を整理することと、(2)ラントシャフト概念の展開をてがかりにして、今世紀のドイツ地理学の潮流をある程度整理したかたちで提示することが、本小論の課題である。

Ⅱ 第1次大戦前のドイツ地理学におけるラントシャフト論

ラントシャフトという言葉が地理学におけるキーワードとして盛んに用いられ、その概念内容に関する議論が活発になされるようになったのは、ほぼ第1次世界大戦以降のことと言える。しかし、ラントシャフトという表現自体は中世にまでさかのぼることができ、また地理学文献の中でもラントシャフトという言葉は19世紀このかたしばしば用いられた。地理学におけるラントシャフト概念の歴史的展開を、はじめて系統的にあとづけたのはビュルガー（1935）であった⁷⁾。彼によれば、ラントシャフト概念を地理学に導入し、明確な位置づけを行った最初の地理学者はホーマイアである。ホーマイア（1805）は、地理的空間単位として、Ort, Gegend, Landschaft, Landの4つを、スケールの大小に応じて区別した⁸⁾。このうち、ラントシャフトは、高い地点（主として山）から一望できる範囲の区域とされた。

近年においては、シュミットヒューゼンが、ラントシャフト概念の発達過程を詳細に吟味している⁹⁾。ホーマイアを出発点とするビュルガーの認識は、すでにプレーヴェにより短見として批判され

ていたが¹⁰⁾、シュミットヒューゼンは科学的ラントシャフト概念の展開を、近世初期まで克明にたどっている。ただ、ここで注意せねばならないことは、ラントシャフトという言葉とラントシャフト概念とは必ずしも同一でないことである。検討の対象はあくまでもラントシャフト概念の方であって、それがかつてどのような名称で表現されたかということは、基本的にはそれほど重要でない。たとえば、「フンボルトはラントシャフトという言葉を用いて、多くの場合画家と同じように、ある区域の情緒的印象や視覚的映像、あるいはその絵画的表現という意味で用いている。これに対して、今日のわれわれがラントシャフトと呼んでいる対象を、フンボルトは‘地域の固有の性格’、‘自然像 (Naturgemälde)’ などという言葉で表現した」とシュミットヒューゼンは述べている¹¹⁾。このような事情は、ビュルガーの考察にもある程度あてはまる。しかし、だからと言って、18世紀以前の地理文献に、ラントシャフトという言葉が重要な用語としてまったく登場しなかったわけではない。ちなみに、シュミットヒューゼンは、1557年に刊行されたハンス・シュタデンの著作をひいて、そこで用いられているラントシャフトという言葉の概念内容を詳細に検討している¹²⁾。

しかし、全体としてみると、ラントシャフトという言葉が地理学の分野で多用されるようになったのは、19世紀もようやく末のことにすぎない。ラントシャフト学という言葉を表題にかかげたオッペル (1884) とヴィンマー (1885) の著作は、その意味できわめて象徴的である¹³⁾。オッペルは、「ラントシャフト学」と題した彼の著作に、「地表の観相学への試み」という副題を付したが、この表現からも明らかなように、彼のラントシャフト概念は風景、景観、相観などの概念にほぼ近いものと言える。彼自身の言葉によれば、「‘ラントシャフト’ という言葉でわれわれが理解するのは、任意のある地点から一目で見わたせる範囲の土地空間である。視界が限られていればいるほど、その姿は小さく、かつ単純なものになるし、視界が開けていればいるほど、それは大きく、複雑なものになる」¹⁴⁾。

他方、ヴィンマーのラントシャフト概念は、オッペルほど明確ではない。「歴史ラントシャフト学」の序文の中でヴィンマーは、ラントシャフトに対して、「言葉によるものであれ、図によるものであれ、記載の対象として設定された地表の任意の一区画」¹⁵⁾ という定義を与えた。しかし、彼はその本論において、ラントシャフトに変化をもたらす自然的、文化的要因のそれぞれについて、歴史的な考察を行っている。地域の全体、総体を意味するはずのラントシャフトが、そこではラントシャフトを構成する要素の部分集合にも適用され、自然ラントシャフト、文化ラントシャフトと名づけられたことが、その後におけるラントシャフトの用語法を混乱させた点、シュミットヒューゼンは指摘している¹⁶⁾。

いわば景観学派の先駆ともいえるこのような流れの中で、ラッセルが大きな役割を果たしたことは思いのほか忘れられがちである。ラッセルは、自然科学的風潮が支配的であった当時のドイツ地理学の中で、彼独自の人文地理学を展開して後進に強い影響を与えたが、他方において、ラントシャフト描写の重要性を強調し、それを実践したことでも特筆される。科学的理解と芸術的把握の総合が要求される分野として、このいわゆる美的地理学 (ästhetische Geographie) の領域は、フンボルトを先駆者とはするものの、当時の科学主義的風潮の下で發育不全の状況を示していた¹⁷⁾。このような中で、ラッセルは、地理学における総合的記述部門として、ラントシャフト学が一層発展すべきこ

とを強調した。ラントシャフトの記述は、地表のあらゆる現象を総合的に把握することを任務とする地理学に当然帰属するものであること、なぜならラントシャフトの全体的記述なくしては完全な地誌とは言えないこと、このような課題を達成するためには科学的知識にのみ依存するのでは不十分であり、詩人や風景画家の自然把握に学ぶ必要のあることなどが主張された¹⁸⁾。

オッペル、ヴィンマー、ラッセルのいずれにおいても、ラントシャフトをそのまま風景もしくは景観と置き換えることはできないが、ラントシャフトが何よりもまず風景もしくは景観としてとらえられていることは否定できない事実である。近世以降、ラントシャフトには、大きく分けると、地区、地域という意味と、風景、景観という意味の2つの系列が並存してきた。ハルトにならって、これをラントシャフト（地域）、ラントシャフト（景観）と表現するならば、19世紀以降のドイツでは、一般にラントシャフト（景観）が圧倒的な優勢を示している¹⁹⁾。この時期における地理学でのラントシャフトの用語法は、地理学独自の用法というよりも、このような一般的傾向をそのまま反映している側面が強いように思われる。

他方、このような美的地理学の流れに対して、これとは異なる観点が存在したことも無視するわけにはいかない。20世紀前半におけるドイツ地理学のラントシャフト論は、これら2つの流れの錯綜もしくは統合としてとらえることができるからである²⁰⁾。シュルツは、このような流れを代表する地理学者としてキルヒホフ、マツァット、ガイストベックなどをあげ、そのラントシャフト論を次のように要約した²¹⁾。ラントシャフトとは、土地空間の固有な性格によって、周囲の空間とはっきり識別されるような区域のことに他ならない。地理学は、政治的地域単元を基盤にすべきではなく、さまざまな現象が因果的に関連し合って形成される自然な地域単元（すなわちラントシャフト）に基づくべきである。このような考え方は、リッターのいわゆる地理的個体や、さらには「純粹地理学」の理念へと、系譜的につながっている²²⁾。ラントシャフトを、このような性格をもつ地域単元としてとらえるみかたは、キルヒホフの流れをくむヘットナーを通じて、20世紀のドイツ地理学にきわめて強い影響をおよぼした。

Ⅲ 両大戦間期におけるラントシャフト論の展開

1920年代から30年代にかけては、地理学の本質と方法をめぐる議論が、ドイツで活発に展開された時期といえる。特に1920年代には、相対立する多彩な主張が並び立ち、さながら百家争鳴の観を呈した²³⁾。この時期になされた議論は諸外国にも大きな影響を与えた。地理学の確立期にあった当時の日本でも、ドイツ地理学の動向に強い関心が寄せられ、主要な業績の多くが翻訳されたり、紹介されたりした。

これらの議論において、ラントシャフトという言葉と概念は、多くの場合まさに中心的な役割を演じていた。1920年代のドイツ地理学で、ラントシャフトという言葉とともにまず思い浮かぶのは、パッサルゲの名前であろう。彼の提唱したラントシャフト学は、社会的に広く注目を集め、数多くの信奉者をかちえたが、地理学界の内部では強い批判にさらされた。また、1920年代の初めに、「新しい地理学」の旗の下で華々しいスタートをきったバンゼも、ラントシャフトを彼の地理学方法論の中心

概念としていた。さらには、20世紀前半のドイツ地理学思想を代表するヘットナーとシュリューターの2人も、ラントシャフトをめぐる議論と無関係ではなかった。シュリューターは、人文地理学の主要分野として文化ラントシャフトの科学的研究をあげ、その重要性を強調したが、そこでの文化ラントシャフトは、文化景観と訳してほぼさしつかえないものであった。また、ラントシャフトを地域論的な観点でとらえたヘットナーは、ラントシャフト学が地誌学に他ならないことを繰り返し主張した。

両大戦間期に主張されたさまざまなラントシャフト概念は、しかしながら、すでに前節でも多少触れたように、1920年代以前に基本的にはすべて出揃っていた²⁴⁾。それゆえ、この時期は、さまざまな流れが各自の主張を繰り返しながら、それぞれに自己発展を遂げた時期としてとらえることができる。もちろん、それぞれのラントシャフト概念の内容は、たがいにまったく相容れないものではなく、共通する側面を多分にもっている。さらには、その概念内容があまり明確でないこともあるし、場合により、また時期によって、それが変化することもしばしばみられる。以下では、このような点に留意しつつ、それぞれのラントシャフト概念に基本的と思われる性格について、その特徴を吟味することにしたい。

III-1 パッサルゲのラントシャフト論²⁵⁾

オッペルやヴィンマーのラントシャフト学が学問的には大きな反響を呼ばなかったのに対して、パッサルゲの提唱したラントシャフト学は、パッサルゲ自身のきわめて精力的な研究活動とも相俟って、両大戦間期のドイツ地理学で、つねに脚光をあびる存在であり続けた。ラントシャフト学（初期の論文ではラントシャフト地理学と名づけられた）の意義と位置づけに関するパッサルゲの見解は、すでに第1次世界大戦の直前に書かれた論文で明確に展開された²⁶⁾。さらに、大戦後には、「ラントシャフト学の基礎（全3巻）」（1919/20）、「比較ラントシャフト学（全5巻）」（1921～30）、「記述ラントシャフト学」（1929）など、みずからの構想を体系的に展開した著作をたて続けに出版し、ラントシャフト学という表現とパッサルゲの名前とを分かちがたく結びつけた。

もともと、パッサルゲのラントシャフト学は、当時の自然地理学にみられた地形学の偏重やデービス（浸食輪廻）説の重視に対抗して、総合的な自然把握を追求することで、地誌学研究に確固たる基盤を提供することをその目的としていた²⁷⁾。後に、ラントシャフト学の枠組は、地理学のさまざまな領域を含むように拡張され、ヘットナーがしばしば批判したように、「従来の地理学、とりわけ地誌学となんら異なるところがない」²⁸⁾ 様相を呈するにいたった。しかし、総合的な自然としてのラントシャフトというとらえ方は、パッサルゲ地理学の基盤に一貫して存在しており、人文事象はそのようなラントシャフトに対する依存関係という観点から主として考察された。それゆえ、パッサルゲのラントシャフト概念の基軸をなしたのは、自然、風土、環境、土地などの言葉で表わされるものだったと言える。自然と人文という、基本的には環境論的な図式を踏襲しながらも、自然をその個々のカテゴリー（地形、気候、植生など）に解消してしまうのではなく、複合的な自然空間を総合的に把握しようとした点に、パッサルゲのラントシャフト学がドイツ地理学における新しい流れの一翼になった所以が認められる。

他方、ラントシャフトという言葉の使い方において、パッサルゲがきわめて不注意であり、同じ著作の中ですら、その意味がまちまちであったり、あいまいなことが多いのも事実である。パッサルゲは、ラントシャフトの景観の側面をいたるところで強調した。「目に映じているもの、それがラントシャフトである」という言葉は有名であろう²⁹⁾。また、パッサルゲは、「ラントシャフトには、何よりもまず地表で知覚されるものが含まれる——それが空間と密接に結びついているかぎりにおいて、それゆえ、あらゆる文化景観がそこに属することは自明である。集落、交通路、さらには文化、行政、政治に関する現象であっても、視覚にはっきり映ずるものはラントシャフトに含まれる」と述べている³⁰⁾。これは、出発点でのパッサルゲの立場とは明らかに異なると言わざるを得ない。もっとも、続けてパッサルゲは次のような限定を加えている。「ただし、動物と人間は‘ラントシャフトの構成要素’ではない。なぜならラントシャフト空間の設定と区分に際して、それらを指標として用いることはできないからである。」³¹⁾ 他方で、パッサルゲは、ラントシャフトを土地の広がりという意味にも用いた。彼のいわゆる「自然的ラントシャフト」は、明らかに自然地域のことを意味している³²⁾。このような一貫性の欠如に対して、シュミットヒューゼンは、「パッサルゲの学問的生涯は、確固たる理論的基盤を欠いた時に、かぎりなく大きな努力が、あまりに小さな結果しかもたらさずに浪費されてしまうことを示す一例である」と、厳しすぎるほどに厳しい批判をくだしている³³⁾。

Ⅲ-2 バンゼのラントシャフト論

バンゼの名前は、1920年代に盛んに用いられた *Neue Geographie* (新しい地理学) という言葉と密接に結びついている。そこでは、もっぱら分析のみをこととしていた従来の科学的地理学が批判され、対象の把握および表現の両面で、主観的あるいは芸術的な方法の重要性が強調された。*Neue Geographie* の考え方は、とりわけ地理教育の分野で大きな反響を呼んだが、同時に、オプスト、フォルツ、シュレPPER、シュペートマンなど、著名な地理学者たちにも影響を与え、その主張の一部が受け容れられた。また、戦前期の日本でもバンゼの主張は広く注目を集め、その地理学理論の紹介がかなり詳細になされたほどである³⁴⁾。

ラントシャフトという言葉は、このバンゼの地理学理論において、終始キーワードとして用いられた。地理学の本質を示す中心概念として、バンゼは ‘*Landschaft, Milieu*’ (1912), ‘*Landschaft, Seele*’ (1928), ‘*Landschaft, Volkheit*’ (1933) と、さまざまな表現を用いたが、ラントシャフトはいずれの場合にも共通して含まれている³⁵⁾。

みずからの地理学観をはじめて明確に示した1912年の論文において、バンゼは *Landschaft* と *Milieu* のそれぞれについて、次のようなとらえ方をしている。地理学における地域把握は、すべての地理的要因を包括的に考慮したものでなければならない。*Milieu* とは、そのような全体的特性を表わした言葉である。これに対して、ラントシャフトは、知覚できるかぎりにおいての土地の特性であり、*Milieu* の下位概念に相当する。ここで言うラントシャフトは、ラントシャフトそのもの（すなわちある時に、ある地点で目にした景色）とは異なる。それは典型的なラントシャフトを意味する³⁶⁾。第1次世界大戦後に刊行された地理学辞典でも、バンゼはラントシャフトに対して同じような定義を

与えている。すなわち、「地表の一部が、主として視覚的映像を通じて、さらにはまた音、臭いならびに気候によって、人類に喚起するところの感覚上の全体的印象。ラントシャフトは、あらゆる地理的要素の総合であるとともに、地理学的記載の頂点をなすものである。」³⁷⁾ このような定義は、景観という言葉で一般に理解される内容とはほぼ一致している。

このような意味でのラントシャフトが、地理学にとって重要な意義をもつ理由を、バンゼは次のように説明している。(1)あらゆる地理学的考察がラントシャフト(景観)をその出発点にするという点で、それはそれまでの地理学の基本的な悩みであった学問的一元性の問題を解決する。(2)従来の地理学が、さまざまな現象の並列的な考察へと発散しがちであったのに対して、それは限らない考察対象の中からその土地にとって本質的なものを判別する基準を与える。さらに、(3)ある土地の地理学的記述に際して、それは内的本質を核としてさまざまな素材を配列するための手引きを提供してくれる。さまざまな個々の現象を一つの映像に統合して把握すること、それを言葉で表現して読者に伝えることが重要だ、とバンゼは主張した³⁸⁾。

ちなみに、バンゼは1932年に「地理ラントシャフト学」という著作を出版したが、その中でパッサルゲのラントシャフト学を次のように批判している。「その名称は誤解をもたらす。なぜなら、それはある空間の視覚的な様相を考察しているわけではなく、単にその空間における地理的諸要素の物的充填にかかずらうのみだからである。ラントシャフトという言葉をもここに用いるのは誤りである。ここでは旧来の地誌学の枠組がそのまま踏襲されている。(中略)この種の‘ラントシャフト学’は、本書で提示せんとする真のラントシャフト学とは、それゆえまったく無関係である。」³⁹⁾

バンゼは、みずからの地理学理論を、フンボルト、リッターに出発し、リヒトホーフエン、ヘットナーへと引き継がれてきたドイツ地理学の正統を正しく受け継いで、さらにそれを発展させたものと位置づけた⁴⁰⁾。しかし、地理学の対象を景観に限定し、「肉眼で実際に見えるものだけが地理学に属する」⁴¹⁾とするバンゼの見解は、ヘットナーの地理学理論と大きく食い違っている。さらに、科学の枠を踏みこえ、芸術性を強調したバンゼの考え方は、学界の主流とはほとんど無縁であり、つねにドイツ地理学の異端でしかありえなかった。次節で紹介するいわゆる景観学派からも、バンゼの地理学はこの点で厳しく批判されている。「科学的研究のラントシャフトに対する態度は、芸術のラントシャフトに対する態度と、次の点で根本的に異なっている。前者においては、心的印象が強調されることはなく、客観的な事実の追求、すなわち、観察者がだれであっても常に同じである観察事実の追求が第一とされる。(中略)科学にとって価値があるのは事実の尊重のみ、真実のみであって、個人的感情や想像力ではない」とハッシンガーは述べている⁴²⁾。

III-3 文化景観研究の発展

今世紀前半のドイツ地理学を特徴づけた文化景観研究の流れは、主としてシュリューターの地理学理論の枠組に沿って展開された⁴³⁾。ラントシャフトという言葉と概念は、そこでも地理学の中核に位置するものとして重視された。「地理学の自然科学的諸部門に共通する指導的理念として、ひとつの概念が存在する。その概念に対して、われわれは、すべての意味を満たす適切な表現をもたないの

で、ラントシャフトおよびラントシャフト像という言葉をあてはめた。というのは、これらの言葉が多くの重要な点で、この概念を正しく表わすからである。⁴⁴⁾「同様の中心理念のもとに地理学の人文部門を同じように集約することは、学問の統一性を重視するものにとって当然のことであろう。その場合、人文地理学は、一口で言えば、文化景観の学ということになる。」⁴⁵⁾

ラントシャフト概念を導入することで、地理学に固有の対象が確保され、さらには地理学諸分野の統一性が保証されるとシュリューターは主張した。地理学の課題が、雑多な知識を地域ごとに整理することであり得ないのは自明であろう。限りない素材を地理学的観点から内的に秩序づけるような原理が不可欠である。そのような原理として、従来、自然環境と人文現象の因果的關係とか、事象の空間的秩序とかがしばしば主張された。しかし、これらの理念はいずれも、素材の選択について何ら手がかりを与えない、とシュリューターは指摘した。彼は、これらにかわるものとして、相観の原理を提唱したのである。シュリューターによれば、「地理学が追究するのは、空間的知覚、すなわち視覚と触覚によって認知できるかぎりにおいて、地球に帰属する諸現象の形態と秩序に関する知識である。」⁴⁶⁾それゆえ、素材の選択に際して第一に問うべきことは、その現象がラントシャフトの要素であるか否か、である。また、それぞれの要素の重要さは、ラントシャフト像にそれがどの程度の影響を及ぼしているかによって決定されることになる。

このような考え方から導かれる研究のプログラムを、シュリューターの主たる関心事であった人文地理学について言うならば、「人文地理学にわりあてられるべき研究対象としては、人類の活動がラントシャフトに刻んだ多数の痕跡があげられる。それは集落であり、農地であり、交通路である。これらすべてを地表にあとづけ、さらに自然、経済、社会など可能なかぎり多面的な要因を考慮して科学的に説明することこそ、これまでその系統的な取扱いがほとんどなされてこなかった課題であり、それ自体ですでに一つの大きな研究課題といえる。」⁴⁷⁾20世紀初頭に方向づけられた文化景観研究のこのようなプログラムは、その後のドイツ地理学で大きな流れを形成した。たとえば、1923年にクレプスは「自然と文化景観」という論文をあらわし、文化景観研究に際しては歴史的な理解が不可欠であること、すなわち発生論的な視点や、発展系列上での位置づけなどがそこでは重要なことを強調した⁴⁸⁾。また、マウルは、人文地理学の主要な領域として「文化景観の地理学」を構想し、それを「人類によるラントシャフトの変容、変化に関する学」と性格づけた。さらに彼は、経済地理学、集落地理学、交通地理学の3部門を、「分析的な」文化景観の地理学を構成するものとして位置づけた⁴⁹⁾。

地理学の研究課題として相観を何よりも重視したシュリューターの見解は、しばしば彼のラントシャフト概念それ自身を示すものとして解釈された。たとえば、ヘットナーは、シュリューターの地理学理論を批判して、次のように述べている。シュリューターは「視覚にとらえられるものとしてのラントシャフトの概念から出発する。そして、地理学的考察を、外面に現われるものだけに限定する。

(中略)しかし、地理学が全体としてかくも一面的であるべきではない。」⁵⁰⁾これに対して、シュミットヒューゼンは、このような理解が誤りであることを主張している。「なぜなら、‘ラントシャフト’がもし単に‘像’であるならば、ラントシャフト像という言葉は余分なものになってしまうからである。シュリューターは、それゆえ、しばしば言われるようには、ラントシャフト概念の内容を限定し

なかった。ラントシャフトはその相観から把握されるべきだ、と彼が強調する場合、それは、研究のアプローチの仕方を言っているのであり、同時にまた、ラントシャフトにおける自然と人間を同等に考慮すべきであるという不可避的な結論を主張しているのである。⁵¹⁾しかし、シュリューターの用語法において、ラントシャフトとラントシャフト像はしばしば同じ意味に使われているし、文化ラントシャフトという表現の場合にははっきり文化景観を意味している。したがって、シュリューターのラントシャフト概念の核に、景観、相観があったことは否定できない事実であるように思われる。

シュリューターのラントシャフト概念、すなわち景観学としての地理学という考え方を、さらに明確に展開してみせたのが、フィンランドの地理学者グラネである⁵²⁾。シュラムケ(1975)は、グラネが非ドイツ語圏の地理学者だったことが、むしろ有利に作用して、当時のドイツで行われていたラントシャフト論の一般的流れを適確に把握させた、と指摘している⁵³⁾。グラネの地理学理論は、シュリューターと同じく、相観の原理に立脚していた。地理学の研究対象は、人間を取りまく知覚しうる世界であるとされ、それを記述し、類型化を行い、さらにはその内部での諸要素の連関構造を解明することが、地理学の研究課題とされた。地理学の研究対象は、知覚する人間への遠近に応じて、NäheとLandschaftに分けられた⁵⁴⁾。このうち、Näheは身近な世界を意味し、視覚ばかりでなく、嗅覚、触覚、聴覚など、すべての感覚で把握しうる範囲とされた。これに対して、ラントシャフトは目で見られる範囲、すなわち視界を意味した。ラントシャフトのこのような用語法は、日常語でのラントシャフトの主たる用法に一致する、とグラネは述べている⁵⁵⁾。グラネの地理学理論は、研究対象を知覚しうる世界に限定した点でシュリューターの流れを受け継いでいるが、同時にまた、ラントシャフトの典型的把握とその空間的区分を重視したという点でパッサルゲとの類縁性を感じさせる。

III-4 ヘットナー、ヴァイベルおよびビュルガーのラントシャフト論

ラントシャフトを主として景観という意味でとらえたパッサルゲ、バンゼ、シュリューターなどに対して、これとは別の見方も有力な流れとして存在した。たとえば、シュリューター(1928)は、みづからの用語法と異なるとした上で、「近頃の方法論文献で非常にしばしば現われる用法——すなわち、有機的な統一性をもつ小さな区域」としてのラントシャフトについて触れている⁵⁶⁾。このようなとらえ方が、19世紀の末に地理学の一部ですで見られたことは、第II節の最後で触れた。この流れを引き継いだ代表的な地理学者がヘットナーであった。

ヘットナーは、ラントシャフト概念を限定的にとらえることに強く反対した。ラントシャフトを特徴づけるあらゆる性質やその相互的連関こそが、地理学の対象でなければならないとヘットナーは主張した。「ある現象が地理学の研究対象になるのは、それがラントシャフトの本質(Wesen)に属しているからであって、景観像の一部を構成しているからでは決してない。」⁵⁷⁾ヘットナーによれば、ラントシャフトの本質は次の2つの関係構造に立脚している。その一つは、場所ごとの多様性とその空間的連関である。換言すれば、地理的な複合体あるいはシステムが存在であり、河川網、交通地域などがその例といえる。もう一つは、ある場所での多様な自然界およびそのさまざまな現象間に存在する因果的連関である。それゆえ、地理学の研究課題は、さまざまな現象相互間の作用・連関・共存関係

を把握することにより、それぞれの場所の性格を認識することである、とヘットナーは主張した⁵⁸⁾。

ヘットナーのこのような考え方は、ヴァイベルやビュルガーのラントシャフト論にも反映している。ラジオ講座での講演の中で、ヴァイベル（1933）は、地理学におけるラントシャフト概念の現状を紹介し、多様な見解の整理を試みた⁵⁹⁾。その中で彼は、日常語としてのラントシャフト（すなわち景色、風景）から派生した景観、相観概念とは別に、地域的広がりを示す言葉として、ラントシャフトが従来から地理学の重要な基礎概念であったことを強調した。後者の意味でのラントシャフトは、ラント（国もしくは地方）よりも小さな空間の単位であり、また、知覚の有無によらず、あらゆる土地特性の全体的性格に基づいて識別された地域を意味した。ヴァイベルは、シュリューターやグラネのラントシャフト概念がそれぞれ独自の論理をもち、地理学に大きく貢献したことは認めながらも、だからと言って、相観としてのラントシャフトが地理学の研究課題を独占するものではないと述べている。

さらに1935年には、ビュルガーが地理学におけるラントシャフト概念について包括的な考察を発表した⁶⁰⁾。シュミットヒューゼンはこの論考を、両大戦間期に特徴的だったラントシャフト概念の混乱を整理し、「科学的なラントシャフト概念の明確化に向けて最初のがかり」⁶¹⁾を提供したものと評価している。ビュルガーは、ラントシャフト概念を次の3つの側面から考察した。(1)ラントシャフト概念の歴史的展開。(2)現代におけるラントシャフト把握の根本問題。(3)新しい潮流。新しい潮流として、パッサルゲ、シュベートマン、フォルツ、バンゼなどが見解がそれぞれ吟味されてはいるが、ビュルガーの立場は、基本的にヘットナーの流れをくむものであった。結局のところ、地理学におけるラントシャフト概念として、ビュルガーは次のような定義を提唱している。「地理(学)的ラントシャフトという言葉は、今日の地理学において、その外観およびそこでの諸現象間の相互連関によって、また内部的、外部的な位置関係によって、周辺空間とはっきり識別できるような一定の特徴を有する空間単元を形成している地表の一区画のことを意味している。」⁶²⁾

ビュルガーの論考が現われた後も、ラントシャフト概念をめぐる混乱がおさまったわけではなかった。1938年にアムステルダムで開催された国際地理学会では、ラントシャフト概念の検討が中心テーマの一つとなり、ドイツ人を含む多くの研究者によって討議されたが、そこでも見解の対立が目立ち、合意形成の難しさをうかがわせている⁶³⁾。

IV 第2次大戦後の動向

IV-1 ドイツ地理学におけるラントシャフト概念の確立と普及

ラントシャフト概念をめぐる理論的検討は、第2次大戦後の西ドイツの地理学においても、きわめて重要なテーマであり続けた。特に、1950年代は、地理学方法論の中心として、ラントシャフトが活発に論じられた時期といえる。パッフェン（1973）は、ビュルガーの研究に代表される1930年代後半の時期が、科学的ラントシャフト概念の明確化をもたらした第1期であるのに対して、戦後のこの時期は第2期に相当すると位置づけた⁶⁴⁾。地理学におけるラントシャフト概念をめぐるの今世紀の論議は、「1950年代の後半から60年代の初めにかけて、まさに最高潮に達し」⁶⁵⁾、そこでの論議を通じて、ラントシャフト概念に対する共通の認識が確立されたとして、パッフェンは次のシュミットヒュー

ーゼン (1963) の言葉を引用している。「今日のわれわれは、ラントシャフト概念の内容をめぐる過去 150 年近くの歴史を、以前とは違った目で眺められる位置に立っている。基本的認識についての議論がまだ未解決だったわずか数十年前にくらべると、われわれの視界はより明確である。過去を振り返ってみた時に、科学的なラントシャフト概念が、かつてのあまりに錯綜したラントシャフト論議の中から、紆余曲折はたしかにあったものの、基本的には一貫した発展過程を経て成立したことに対して、今日のわれわれは、ある種の驚きを感じないわけにはいかない。」⁶⁶⁾

この時期のラントシャフト論については、その重要性のゆえに、これまで多くの考察や紹介の努力がなされてきた。すでに1958年には、ヴェルンリが、カロールを中心とするチューリヒ学派の論議をふまえつつ、ビュルガー以後のラントシャフト論の展開について展望を試みている⁶⁷⁾。また、1967年にシュトルケバウムによって編集された「地理学の対象と方法」には、この時期のラントシャフト論の文献が、少なく数えても 6 編、地理学本質論の基本文献として再録されている⁶⁸⁾。さらに、1973年にはパッフェンが、この時期に書かれた論文を中心に、それまでのラントシャフト論の中から23編の文献を選択し、「ラントシャフトの本質」と題して公刊した⁶⁹⁾。

この時期にドイツで展開されたラントシャフト概念の理論的考察は、わが国でもいち早く吸収された⁷⁰⁾。そのような中で、従来ラントシャフトの訳語として定着してきた景観という言葉についても、その不適切さがしばしば指摘されるにいたった⁷¹⁾。ドイツ地理学におけるラントシャフト概念それ自体の発展の結果、ラントシャフトと景観の意味のずれは、戦前にくらべて一層拡大したが、それにもかかわらず訳語をそのままにしたことが、今日まで続く用語法上の混乱をまねいた最大の原因である。

以下では、この時期に特徴的にみられたいくつかの論点を中心に、ラントシャフト概念をめぐるこの時期の議論を、多少なりとも整理したかたちで提示しておきたい。

(a) ラントシャフトの基本的性格

まず第一に指摘できることは、戦後のラントシャフト論が、ビュルガー (1935) の提唱したラントシャフト概念を基調にして展開したことである。この時期のラントシャフト論文献として重要な位置を占めるトロール (1950)、ジーベルト (1955) の両論文では、ビュルガーの定義がほとんどそのまま容認されている。ジーベルトによれば、ラントシャフトに対する「さまざまな異なった地理学的定義の中で、ビュルガーが20年前に提唱したそれは、今もなお有効である。」⁷²⁾ また、トロールは、ビュルガーの定義がラントシャフトとラントの違いを区別していない点で不適切だとはしながらも、基本的にはビュルガーの定義を受け容れて、次のようなとらえ方を提唱した。「地理(学)的ラントシャフト (ラントシャフト个体, 自然的ラントシャフト) という言葉で、われわれは、その外観およびそこでの諸現象間の相互連関によって、また内部的、外部的な位置関係によって一定の特徴を有する空間単元を形成し、かつ地理(学)的、自然的境界で別の特徴を有するラントシャフトへと移行するような地表の一区画を意味している。これに対して、ラントは、政治的もしくは行政的に区画されたある程度歴史的な領域のことを、あるいはある特定の民族が居住する区域のことを意味する。」⁷³⁾ 前節の末尾で引用したビュルガーの定義に対して、わずかな変更が加えられただけであることは、両者を比

較することで容易にみてとれる。

しかし、このようなビュルガー的なとらえ方を発展させ、この時期におけるラントシャフト論の本格的な出発点になったのは、ボーベック／シュミットヒューゼン（1949）によるラントシャフト概念の明確化への試みであった⁷⁴⁾。そこで提出されたラントシャフト概念の枠組が、その後の方法論文献において踏襲され、敷衍され、部分的に手直しされたという意味で、この論文の与えた影響はきわめて大きなものがある。

この論文で強調された第一の論点は、ラントシャフトが、地理学の研究対象である地表もしくはその部分空間の、最高次の統合段階であるということであった。地理学の研究対象は、無生物界、生物界（人類を除く）、精神界（人類およびその創造物）の3者を含み、それらの領域ではそれぞれ異なった種類の法則が作用している。ラントシャフトは、これら3者に属する現象と作用がすべて統合された段階に適用される表現であり、「空間構造体の動的なシステム」⁷⁵⁾、あるいは、「四次元の時空間的な現象複合体もしくは構造体」⁷⁶⁾を意味している。

のちに、シュミットヒューゼンは、ラントシャフトとラントシャフト空間を意識して区別するようになった⁷⁷⁾。彼にとって、ラントシャフトはシステムであり、構造であった。それゆえ、同一のラントシャフトによって特徴づけられる区域は、ラントシャフト空間と名づけられて、ラントシャフトとは厳密に区別された。シュミットヒューゼンによれば、ラントシャフトは、「全体的性格により単元として把握しうる地圏（Geosphäre）の一区画の構造」を意味した⁷⁸⁾。そして、そのような区画の広さについては、上限が地圏全体、下限が地理学にとって意味のある最小単位（すなわち Ökotop）という以外、何らの限定も付されなかった。ホーマイアの Ort, Gegend, Landschaft, Land, あるいは、ヘットナーの Örtlichkeit, Landschaft, Land, Erdteil など、それまでスケール概念と密接に結びついてきたラントシャフトが、ここでは、規模とまったく無関係な上位概念として規定され、その下でラントシャフト空間の規模階層が考察されるようになったのである⁷⁹⁾。

ボーベック／シュミットヒューゼン論文のもう一つの論点は、ラントシャフト研究を地誌学とはっきり区別し、法則定立的な分野として位置づけたことである。地誌学は、地表の部分空間を個性記述的に、すなわち時空間において一回性のもの（Einmaliges）として考察する。このようにして、地表の部分空間を個別的な特定の構造体としてとらえた場合、われわれは、それをラントと表現する（地誌学 Länderkunde は文字どおり訳せばラント学である）。これに対して、ラントシャフト研究では、比較に基づいて地表の部分空間を類型的に把握することが目指される。類型として把握された空間単元のことを、われわれはラントシャフトと呼ぶのである⁸⁰⁾。このような見方は、従来における一般地理学と地誌学の二元性の問題を、より系統的な地理学体系の中に解消させようとするものであった。ボーベック（1957）は、(1)地表を構成する要素（地殻、水、大気、植物、動物、人間）を個々に研究対象とする一般地理学と、(2)地表の部分空間を個性記述的に研究しようとする地誌学との中間に、(3)地表構成要素の連関構造を類型的に把握することを目指すラントシャフト学が存在することを強調した⁸¹⁾。ラントシャフト学は、このように位置づけられることによって、全地理学体系の中で、まさにかなめとなる重要な地位を占めるとされた。

ラントとラントシャフトのこのような区別はすでに戦前からみられ、その最も強力な主張者はラウテンザッハであった。1938年のアムステルダム国際地理学会で、ラウテンザッハは、ラントシャフト概念について以下の6点を地理学界での共通理解にするよう提案した⁸²⁾。

- (1) 地域地理学（地誌学、ラントシャフト学）は、全地理学の中で主要部分を占める。
- (2) ラントシャフトとラントの概念は、地域地理学で最も重要な概念である。
- (3) 地理(学)的ラントシャフトは、単に相観上の单元や美学的な单元ではない、それは、地表の各部分空間において、その構成要素相互を結びつけている発生的、力学的、機能的関係のすべてを含んでいる。
- (4) 地理(学)的ラントシャフトは、類型化の視点から把握された地域を意味する。
- (5) 地理(学)的ラントは、個別化の視点から把握された地域を意味する。
- (6) ラントシャフトの地理学（ラントシャフト学）は、それゆえ、ラントの地理学（地誌学）とはまったく別のものである。それらは、地域地理学を構成する2つの異なった分野である。

ちなみに、この提案は合意を得るまでにはいたらなかった。

ラウテンザッハによれば、従来のラントシャフト概念は、ラントシャフトを、(I)個別的な特性を有する土地空間とみなすものと、(II)類型の空間的表現とみるものに、大きく2分される⁸³⁾。彼はこれをさらに細分して4つのラントシャフト概念をあげ、従来の主張をそのいずれかに位置づけた。(Ia)ラントシャフトを単に小規模なラントとみなすもので、ヘットナーの見解がその典型である。(Ib)ラントシャフトを、相観という視点から認識された土地空間とみるもので、シュリューター、グラネ、ハッシンガーなどにみられる見解。(IIa)単一の支配的現象に類型をもとめようとするもの。火山ラントシャフト、米作ラントシャフトなどがその例で、このような見解はコルプやヴィンクラーにより代表される。(IIb)数多くの現象の複合に類型をもとめようとするもの。ラウテンザッハは、このグループに、パッサルゲ、クレプスなどとともに、みずからを位置づけている⁸⁴⁾。

イギリス地理学での類型地域 (generic region) と個別地域 (specific region)⁸⁵⁾ にある意味で対応するような、ラントシャフトとラントのこうした性格づけに対して、これとは別のもう一つの立場が存在することを無視するわけにはいかない⁸⁶⁾。先にあげたトロール (1950) の定義では、ラントシャフトが自然的、総合的な空間单元であるのに対して、ラントはもっぱら人間社会に基づく空間单元として性格づけられた。すなわち、そこでの対比は、個体と類型の違いではなく、空間单元の設定原理の違いに立脚していた。このような見解は、のちにウーリッヒ (1956) によってさらに詳しく展開された⁸⁷⁾。彼によれば、ラントシャフトは、同一の機能によって特徴づけられる「単元的な構造をもつ空間として把握される。これに対して、歴史的発展や自然的限界によって相互に結びつけられたひとかたまりの区域が、これとは別に存在する。このような区域は、さまざまに異なったラントシャフト（もしくはその一部）が機能的な連関を通じて、ラントという相互補完的な共通の生活空間を形成したものである。」⁸⁸⁾ たえば、「ラント」としてのヴェストファーレンというとらえ方で、ミュラー・ヴィレ (1952) は、この種の歴史的に形成された領域の機能的な結びつきを描き出した。すなわち、ここでは、(ルール地区の) 鉱業および重工業ラントシャフトの一部が、他のまったく異なる文化ラント

シャフトとともに、強い帰属意識をともなった一つのラント（ヴェストファーレン）へと統合されているのである。」⁸⁹⁾ このような観点から、ウーリッヒは、ラントシャフトとラントを類型と個体として性格づける見方を批判し、それが地理学における「方法論的論議を袋小路に導いた」と指摘した⁹⁰⁾。

しかしながら、ラントシャフトとラントの性格づけに関していずれの立場にあるにせよ、上で触れた多くの地理学者たちが、地表を構成するさまざまな要素の総合としてのラントシャフトに、地理学独自の存在基盤を認めていることは、つねに共通してみられる事実である。

(b) カロルのラントシャフト論

第2次大戦後のほぼ同じ時期に、チューリヒ大学のカロルを中心として、ラントシャフト概念の再検討が進められた。そこでの議論は、ラントシャフト論に新しい方向を打ち出したものと主張され⁹¹⁾、主唱者であるカロル、ヴェルンリを中心とするグループは、のちにチューリヒ・ラントシャフト学派と名づけられた⁹²⁾。

チューリヒ学派のラントシャフト論を特徴づける第一の論点は、1920年代以降のラントシャフト論で中心的な役割を演じた全体性（Ganzheit）の概念を、強く否定したことである。「ドイツ語圏で現在用いられている地理(学)的ラントシャフトという概念は、多くの場合、特定の客観的構造を有する地表の一空間単元を意味している。そのような例として、トロール、ビュルガー、シュルツェなどの見解をあげることができる。（中略）それゆえ、多くの地理学者は、地表が多数の（生物個体と同じような）ラントシャフト個体の集合から構成されていると考えている。」⁹³⁾ しかし、「われわれの認識では、このような意味での‘ラントシャフト’は一つのフィクションにすぎず、シュミットヘンナー的を射た表現を借りると、‘あまり根拠のない研究仮説’に他ならない。」⁹⁴⁾ ヴェルンリによれば、古い観点と新しい観点を区別する一つの基準は、ラントシャフトの境界線に対するそれぞれの見方である。「全体性が実在する時にのみ境界もまた実在する。換言すれば、境界が実在するとみなす人たちは、ラントシャフトの全体性を現実のものと考えている。」⁹⁵⁾

カロルは、ラントシャフトを「地圏（Geosphäre）の任意に画定された一区域」と定義し、さらに、ラントシャフトには従来さまざまな意味がこめられてきたため、このような意味でのラントシャフトを明確に示す地理学用語として、Geomer という言葉を採用することを提唱した⁹⁶⁾。このように、客観的に実在するものとしてのラントシャフトが否定された一方で、依然として、地理学の究極的な研究対象は、地表のさまざまな要素の総合であるラントシャフト（Geomer）にもとめられた。「地理学は最後の総合であり、対象となるラントシャフトを、物質・空間・時間の3者を包含する構造として包括的に表現するものである。」⁹⁷⁾ このような考え方に、ハーツホーンの議論との類似性を見出すことは容易である。また、カロル自身は、地理学の研究対象に関するみずからの見解を、ヘットナーの地理学理論と結びつけて説明している⁹⁸⁾。

ラントシャフトの包括的な把握を目指しながらも、その全体的なまとまりや単元性を否定したカロルの立場は、容易に、分析のみをこととする地理学への道に通じていた。全体性（Ganzheit）が否定されるならば、原則的には、分析をまず積み重ねることによって、ラントシャフトの包括的な把握に

まで到達することが要求されることになる。しかし、「まったく恣意的に画定されるラントシャフトが、依然として地理学の研究対象たるべきなのはなぜか」について、カロールは明確な説明を与えていない⁹⁹⁾。それゆえ、このようなラントシャフト概念のもとで、ラントシャフトは、もはや直接の研究課題とはみなされず、むしろ個々の現象がその上で展開する単なる舞台として、ますます把握されるようになった。戦後のドイツ地理学の動向をあとづけて、シュルツは、カロールやヴェルンリ、さらにはネーフのラントシャフト論が、結果的に、ラントシャフト概念の空洞化をまねき、その意図とは反対に、ラントシャフト地理学の自己崩壊をもたらしたと指摘している¹⁰⁰⁾。

1950年代を中心に展開された地理学でのラントシャフト概念をめぐる議論は、西ドイツやスイスばかりでなく、全ドイツ語圏の地理学者を数多くまきこんだ。そこで表明されたさまざまな見解を幅広く紹介することは、この小論の限界を大きく越えている。上では、この時期のラントシャフト論を基本的な特徴づけたと思われる論点についてのみ、多少詳しく触れる程度にとどめた。その他の看過できない研究としては、ネーフのラントシャフト論¹⁰¹⁾、ヴィンクラー¹⁰²⁾、レーマン¹⁰³⁾、シュヴィント¹⁰⁴⁾の議論などがあるが、ここでは、単にその存在を指摘するにとどめたい¹⁰⁵⁾。

IV-2 ラントシャフト論批判の展開

1950年代以降、アメリカやイギリスを中心に、伝統的な地理学理念を否定し、「新しい地理学」の構築を志向する流れが急速に力を増した。このような動きは、1960年代から70年代にかけて、他の国々でも多かれ少なかれ活発化し、全世界へと波及していった。ドイツでは、「新しい地理学」という表現が、1920年代にパンゼを中心として主張された地理学理論と密接に結びついていたため、この時期の新しい動きを示す言葉としては用いられなかった。しかし、1970年前後を中心に、ドイツで活発に展開された地理学の革新運動は、その本質において、アメリカやイギリスにおける動きとまったく同じものであったと言える。ハートは、アメリカの状況を振り返って、次のように述べた。学問的な革新運動が「まず第一になすべきことは、既存の正統派イデオロギーの最も基本的な部分、まさに核を形成する部分を、明確に認識し、これに攻撃を加え、さらにはこれを破壊することである。革命を志すものたちは、伝統地理学の根本が、場所や地域を強調する個性記述的な性格にあると判断した。彼らは、これに代わるものとして、秩序やパターンを理論的に追究する法則定立的なアプローチを提唱した。」¹⁰⁶⁾ 同じように、ドイツ地理学においては、革新運動の最大の攻撃目標が、1950年代から60年代にかけて活発な展開をみたラントシャフト概念に定められたのである。

この時期の地理学革新運動において、重要な理論的基盤とみなされ、大きな影響力をおよぼしたのは、バルテルスの地理学理論であった。彼は、システム概念や生態系（エコシステム）の考え方を導入した定量的なラントシャフト研究が、トロールやネーフをはじめとする東西ドイツの地理学研究者の手で着実な発展を遂げつつあることに注目し、現代的課題に対応した新しいラントシャフト地理学の可能性をそこに見出した。しかし、物質循環やエネルギー循環に基づくこのようないわば「自然地理学」が、地理学の課題を独占するものでないことは明白であった。他方、バルテルスは、ラント

シャフトを最後の統合段階とする従来の考え方に対して、それが実際の地理学研究に何ら具体的な指針を与えないこと、単なる飾り文句にすぎないことを指摘した。「単にごく一般的に定義された‘ラントシャフト’の場合、その内部における構造的連関という仮定は、ヘットナーの‘ラントの本質’をはじめさまざまな言葉で次から次へと言い換えられたり、哲学的な世界解釈と関連して思弁的に説明されたりしたが、全体性（Ganzheit）の主張それ自体が経験的な実証の対象になったことはなかった。地理学の課題は‘あらゆる要素の相互連関’を一つの‘総体’として把握することだとする理論的立場は、実際上は、最終目的をこのようにすることで、個々の孤立した因果関係を、一部は他の科学分野と並行して研究することへの弁明にするためか、もしくは、それぞれ独立した多様な研究成果を（中略）統一性の欠如した地誌へとまとめあげるための弁解にすぎない。」¹⁰⁷⁾ それゆえ、バルテルスは、地理学の将来にとって、自然科学に立脚するラントシャフト研究と、社会科学としての地域研究（Regionalforschung）の明確な分離が必要であり、両者をこれまでどおり癒着させておくことはきわめて不得策であると結論している¹⁰⁸⁾。

このようなバルテルスの考え方をさらに先鋭化させて、既存の地理学理念に真正面から挑戦を試みたのが、同人誌 *Geografiker* を中心とする若き地理学者のグループであった。地理教育と地理学の問題点に関する彼らの議論は、1969年のドイツ地理学会（キール大会）に際してまとめられ、学会での発表、討論を通じて大きな反響をまきおこした。そこでも、彼らの批判の中心にすえられたのは、地域的な総合を重視する従来の考え方であり、ラントシャフト学あるいは地誌学を志向するそれまでの地理学、地理教育のあり方であった。彼らによれば、「ラントシャフト学もしくは地誌学には、課題設定がまったく欠けている。それらはいわゆる‘論理的システム’やシェーマをつくりあげ、それに沿ってデータを拾い集める。そこで確認される関連（たとえば気候や地形に対する依存性）は、月並みなものでしかなく、しかもラントシャフト学によって研究されたものではない。ユートピア的な目標として掲げられている総体的な連関に、それらはあまりにも遠く隔たっている。月並みな関連性の指摘においてそれらは陳腐であり、その目標においては内容のない定式にすぎない。ラントシャフト学あるいは地誌学としての地理学は似而非(えせ)科学である。」¹⁰⁹⁾ キール大会での報告の最後に、彼らは将来の方向として12カ条の提言を行なっている。ちなみに、その中の第6項において、地誌学およびラントシャフト学を大学での地理教育から追放することが、彼らによって強く主張されている。

Geografiker グループのラントシャフト論批判に理論的な基盤を提供したのは、バルテルスだけではなかった。むしろ、この時期に、ラントシャフト概念に対する最大の挑戦者とみなされたのはハルトであった。ハルトの論に対しては、ラントシャフト概念を擁護する立場の地理学者から数多くの反論が集中した。たとえば、ネーフは、ハルトの地理学理論を「破壊的な地理学」と評し、そこには地理学の課題を前向きに検討しようとする姿勢がみられないと厳しく批判している¹¹⁰⁾。

ハルトのラントシャフト概念に対する見方は、次の主張に典型的にあらわれている。すなわち、彼によれば、「ラントシャフト概念は、これまで長い間地理学に多くの実りをもたらしたが」、現在ではむしろ学問の進歩を妨げる「まさに完全な‘認識論的障害’へと転化してしまった。特定の時代に特徴的にみられた理念が、のちに硬直化を示すこのような場合には、研究論理についての分析、そして

何よりもまず意味論的な分析が、その適切な治療法であるように思われる。そのような分析を通じて、それまで‘現実’、‘地理的実体’あるいは‘ものごとの本性’と思われてきたものが、実際には、数ある研究方向やとらえ方の中の一つにすぎないことが明らかになるのである。」¹¹¹⁾ さらに、別の箇所では、当時のラントシャフト概念批判の基本的な論点を、ハルトは次のように要約している。「ラントシャフト概念に対する最近の批判は、(中略)基本的に、次のとき試みに対する抗議であった。すなわち、包括的で‘全体論的な’ラントシャフト概念に基づいて、地理学を他の諸科学の上に位置する総合科学として‘例外主義的に’規定しようとする試みに対して、さらには、地理学の各分野をラントシャフト概念を掲げることで隣接する他の学問分野から切り離そうとする試みに対して、その批判の鋒先が向けられたのである。(中略)批判者たちは、地理学に対するこのような自己認識が、研究実践や学問の将来にとって有害であると考えた。地理学をそのように解釈し、そのような立場から研究を実践することは、地理学を孤立させ、他の学問分野との交流や協力を不能にし、新しい研究方向に対して閉鎖的にさせ、ついには、競合する他の学問分野によって地理学が侵食され、空洞化されることにつながる、と彼らは主張した。批判者たちは、学問的なならざる百貨陳列の現状と、総合や全体性といった壮大ではあるが中身の無いおしゃべりが結びついたこのような状況を拒否して、そのかわりに、(中略)将来性に富み、他分野との競争に耐えるような特定の研究課題や研究方向に対する集中を要求したのである。」¹¹²⁾ このような認識は、ハルトに限らず、バルテルスや Geografiker グループにも共通している。そして、そこで展開された議論に、当時のアメリカやイギリスで盛んに主張された「新しい地理学」の考え方との類似を認めることはきわめて容易である。

IV-3 近年の動向

1970年代以降のドイツ地理学は、全体として、バルテルスの指し示した専門分化という方向に沿って進展したように思われる。社会地理学の流れは、すでに第2次大戦の直後から顕在化していた。社会地理学の推進者たち、とりわけハルトケを中心とする地理学者のグループは、1950年代前後のラントシャフト論議に対して、何ら積極的な反応を示さなかった。社会地理学的な観点が強調されるにしたがって、ラントシャフト概念はますます背景に退き、直接的な研究課題にされることがまれになっていった。このような流れの中で、地理学の統一をラントシャフト概念にもとめる従来の主張が、次第に風化していくであろうことは、容易に予想できたこととも言える。

しかし、ラントシャフトを地理学全体の中心テーマとする合意が崩壊したのちでも、それが依然として地理学の重要なキーワードであり、今日なお頻繁に用いられていることは言うまでもない。ラントシャフト論批判に対しても、さまざまな方面から反論が試みられた。パッフエンによるラントシャフト論集(1973)¹¹³⁾の刊行や、シュミットヒューゼンのラントシャフト学(1976)¹¹⁴⁾は、ラントシャフトに対する伝統的な関心が、引き続き維持、発展さるべきことを強く主張したものであった。また、ラントシャフトという言葉が、今やもっぱら地理学でのみ使われ、社会一般あるいは科学一般の関心から遊離しているというハルトやバルテルスの批判¹¹⁵⁾に対しては、デーレンハウス(1971)¹¹⁶⁾やパッフエン(1973)¹¹⁷⁾が、ラントシャフト擁護の立場から反論を試みている。

他方、若手地理学者の中からも、ラントシャフト概念を再評価しようとする動きが現れた。ヴァイヒハルト（1975）は、地理学で適用されてきた従来のラントシャフト概念を検討して、その用語法上の混乱や矛盾を指摘した。しかし、一方で、地理学方法論を生態学の原理に基づいて再構築することを試み、「人類の生態学」あるいは生態地理学（Ökogeographie）という概念を、地理学の中心に位置するものとして導入した。このことは、彼自身も述べているように、「伝統地理学のラントシャフト概念を、（中略）中立的な概念、すなわち、提起される仮説の操作化や定量化に好適なシステム概念によって置き換える」¹¹⁸⁾ ことに他ならなかった。それゆえ、ハルトは、このような試みが、伝統を批判しておきながら、その伝統をほとんどそのままの形で、再び受け容れることだとして、ヴァイヒハルトの地理学理論に疑問を投げかけている¹¹⁹⁾。

ラントシャフト地理学のもう一つの発展形態は、バルテルスが指摘したように、物質循環やエネルギー循環に基づくいわば自然地理学としてのラントシャフト生態学であった。環境生態学とも言うべきこのような研究方向は、すでに第2次大戦前からトロールとシュミットヒューゼンにより、また、戦後の東ドイツでは特にネーフにより進められてきたが、環境問題に対する関心の増大を背景にして、1970年代以降さらに活発な進展を示している¹²⁰⁾。地理学でのラントシャフト概念をめぐる論議は、従来いづれかと言えば人文地理学あるいは地誌学の領域で行われてきた。ところが、1970年前後のラントシャフト論批判以降、社会地理学の発展ともあいまって、ラントシャフトの重要性が人文地理学の中で大きく低下している。これに対して、近年では、とりわけ環境研究の分野でラントシャフト概念がみなおされているように思われる。ちなみに、ラントシャフト生態学にみられるごとく、ラントシャフトをもっぱら環境という意味に用いる傾向は、ある面でパッサルゲのラントシャフト概念への回帰を示している¹²¹⁾。

V 結 論

ラントシャフト概念は、今世紀のドイツ地理学において、つねに一貫してみられた中心的な理論テーマの一つであった。指導的な地理学者の多くが、ラントシャフトという言葉を用いて、その地理学理論の中心的な理念を表現するために用いたため、さまざまな地理学の流れのいずれにあっても、ラントシャフトはそれぞれの特徴を示すキーワードとして、多かれ少なかれ重要な役割を演じてきた。本小論では、それぞれのラントシャフト概念の内容と意義について、単なるスケッチ的考察を試みたにすぎないが、そのいずれについても、さらに詳細な検討が必要であることは言うまでもない。

地理学におけるラントシャフトという言葉の多義性は、学問分野として地理学が急速な発展を示した19世紀の後半からすでに認めることができ、また、今世紀を通じて、つねに変わることなくみられた事実であった。しかし、一方で、時代の流れに応じて、ラントシャフト論の中心が次第に変化してきたことも否定できない事実である。それゆえ、今世紀のドイツ地理学におけるラントシャフト論の展開は、ドイツ地理学の一般的な流れと対比することによって、より明確に理解することができるように思われる¹²²⁾。以下では、このような観点から、いくつかの目立った特徴を指摘して、本小論の結論にしたい。

19世紀から20世紀初頭のドイツ地理学が、研究の重点を自然地理学（特に地形学）に置いたのに対して、今世紀のドイツ地理学の歩みは、一般に人文地理的側面の比重が次第に高まっていく過程としてとらえることができる。このような流れの中で、その理論的基盤を提供したのはシュリューターであった。彼は、地理学研究の対象を「地表」であるとしたリヒトホーフエンの主張を発展させて、人文地理学の研究課題を、地表の改変にかかわる人類の活動と、それによって形成された地表にもとめた。両大戦間から第2次大戦後にかけて、ドイツ地理学で大きな流れを形成した文化景観研究は、このようなシュリューターの考え方に基づいている。そこで提出された研究プログラムの重点は、地表に刻みこまれた人間活動の足跡に、すなわち、景観像として把握できる現象に向けられた。このような背景の下で、地理学にとってのラントシャフトは、何よりもまず地表の具体的な姿であり、目に見える景観であった。

しかし、これと並んで、地域の内部でさまざまに関連している諸事象の全体像をとらえようとする努力もまた、地理学の重要な流れを代表していた。そして、ラントシャフトは、そのような因果的・機能的連関構造を示すための言葉として用いられたのである。調和や全体性（Ganzheit, Totalität）などの概念としばしば結びつけて解釈されたラントシャフトは、このような構造の存在を表現していた。フンボルト以来、ドイツ地理学の中心理念とされてきた地域的総合の目標、すなわち、地域を構成する諸要素の因果的・機能的連関と、地域個体あるいは地域的単元の追究が、景観としてのラントシャフトと結びついた時に、伝統地理学における地理(学)的ラントシャフト概念の骨格が形成されたと言える。

1970年前後をピークに展開された伝統地理学批判は、このような状況を一変させた。クルス(1970)は次のように述べている。「もしアンケートがなされたならば、大部分の地理学者は、次の点に同意を示すであろう。すなわち、今日の地理学は、新たな発展段階の出発点に位置していること。それは、ちょうど100年程前にみられたのと同じような、学問の歴史の上での重要な変わり目であること、という認識である。」¹²³⁾ この、表面上はまさに断絶と呼ぶにふさわしい変化の中核が、伝統地理学の中心理念に対する挑戦、すなわち、地域的総合という考え方への攻撃であり、ラントシャフト概念や地誌学の拒絶であった。その後のドイツ地理学は、伝統的な理念と新しい理念の対立を軸にして、新たな合意の形成を模索し続けたとも言える。しかし、伝統の否定は、それにとって代わる中心理念の提示を十分ともなっていないかった。極端な場合には、地理学の解体が語られた。「長い目で見ると、制度化された学問分野としての地理学は縮小していくであろう。(中略)それとは無関係に、地理学の伝統的な研究方向は依然として生き続けるであろうが、それはさまざまな‘隣接分野’においてであり、地理学はそれらの分野に解消されることになるだろう。」¹²⁴⁾ このような議論がなされる一方で、地理(学)的ラントシャフトの概念は、ラントシャフトという言葉で表現されるにせよ、別の言葉に置き換えられるにせよ、地理学の本質を示す基本概念として、1970年代以降においても、しばしば検討の対象にされてきた。それゆえ、1950年代前後に展開されたラントシャフト論が、現在においても、地理学理論の重要な基盤として、肯定的にであれ、批判的にであれ、依然として継承されていることを、今日のドイツ地理学を考察するに際して見落とすべきではあるまい。

注・参考文献

- 1) Bartels, D. (1970) : Les conceptions de 《Landschaft》 et de 《Sozialgeographie》 dans la géographie allemande. *Revue Géographique de l'Est*, 10, 3~16.
- 2) Bartels, D. (1968) : *Zur wissenschaftstheoretischen Grundlegung einer Geographie des Menschen*. Wiesbaden, p. 57.
- 3) 下記の文献に充実した書誌が付されている。
 Bürger, K. (1935) : *Der Landschaftsbegriff — Ein Beitrag zur geographischen Erdraum-auffassung —*. Dresden, 115~131.
 Hard, G. (1970) : *Die „Landschaft“ der Sprache und die „Landschaft“ der Geographen*. Bonn, 257~278.
 Sperling, W. (1981) : *Geographieunterricht und Landschaftslehre* (Band 1). Duisburg, 203~213.
- 4) ラントシャフトの訳語については、次の文献が参考になろう。
 飯本信之『政治地理学』, 1929年, 改造社, 13~16.
 辻村太郎『景観地理学講話』, 1937年, 地人書館, p. 1.
 田村百代(1985) : 地理学における「景観」と「相観」——わが国地理学界での混乱——, 立正大学地理学教室創立60周年記念会編『地域の探究』, 古今書院, 421~430.
 なお, 1941年には『地理学』誌上で, ラントシャフトの訳語をめぐって興味深い応酬がかわされている。
 三尾良次郎(1941) : 「景観」という用語を改めた, *地理学*, 9, 66~68.
 胡越生(1941) : 「景観」は「景観」でよい, *地理学*, 9, 459~461.
- 5) Schmithüsen, J. (1976) : *Allgemeine Geosynergetik — Grundlagen der Landschaftskunde —*. Berlin, 74~76.
- 6) Hard, G. (1977) : Zu den Landschaftsbegriffen der Geographie. in Wallthor, A.H. v. und Quirin, H. [ed.] : *》Landschaft《 als interdisziplinäres Forschungsproblem*. Münster, 13~23.
- 7) Bürger, K. (1935) : 前掲 3).
 なお, ビュルガーの著作の要約が, 下記の文献に収録されている。
 Siebert, A. (1955) : *Wort, Begriff und Wesen der Landschaft*. Hannover, 11~39.
- 8) Hommeyer, H.G. (1805) : *Beiträge zur Militair-Geographie der Europäischen Staaten* (Band 1). Breslau.
- 9) 前掲 5), 78~146.
- 10) Plewe, E. (1936) : 書評, *Geographische Zeitschrift*, 42, p. 27.
- 11) 前掲 5), p. 105
- 12) 前掲 5), 93~95.
- 13) Oppel, A. (1884) : *Landschaftskunde*. Breslau.
 Wimmer, J. (1885) : *Historische Landschaftskunde*. Innsbruck.
- 14) Oppel, A. (1884) : 前掲 13), p. IV.
- 15) Wimmer, J. (1885) : 前掲 13), p. 9.
- 16) 前掲 5), p. 123.
- 17) 美的地理学の系譜については,
 Hettner, A. (1927) : *Die Geographie — ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden —*. Breslau, 151~155.
- 18) Ratzel, F. (1904) : *Über Naturschilderung*. München/Berlin, 7~16.
- 19) Hard, G. (1970) : 前掲 3), 28~35. 前掲 6), p. 14.
- 20) Schultz, H.-D. (1980) : *Die deutschsprachige Geographie von 1800 bis 1970 — Ein Beitrag zur Geschichte ihrer Methodologie —*. Berlin, 116~120.
- 21) 前掲 20), 98~107.
- 22) この点については,
 Hözel, E. (1896) : Das geographische Individuum bei Karl Ritter und seine Bedeutung für den Begriff des Naturgebietes und der Naturgrenze. *Geographische Zeitschrift*, 2, 378~396, 433~444.
 Wisotzki, E. (1897) : *Zeitströmungen in der Geographie*. Leipzig, 193~266.
 松井 勇(1941) : ウィゾーツキー純粋地理学, *地理学*, 9, 147~155, 274~280, 449~458.
- 23) 前掲 20), 123~228.
 ラントシャフト概念に焦点を合わせたものとしては,
 Schramke, W. (1975) : *Zur Paradigmengeschichte der Geographie und ihrer Didaktik*. Göttingen

- gen, 71~125.
- 24) 両大戦間期の出発点におけるドイツ地理学でのラントシャフト論の状況については、
Friederichsen, M. (1921): Die geographische Landschaft. *Geographischer Anzeiger*, 22, 154~161, 233~240.
- 25) パッサルゲのラントシャフト論と、それに対するヘットナー、ヴァイペルの批判については、すでに春日茂男が詳しく紹介している。
春日茂男 (1982): Land と Landschaft ——近代地理学における一争点——. 人文研究 (大阪市立大学文学部紀要), 34, 267~288.
- 26) Passarge, S. (1912): Physiologische Morphologie. *Mitteilungen der geographischen Gesellschaft in Hamburg*, 26, 133~337.
Passarge, S. (1913): Physiogeographie und vergleichende Landschaftsgeographie. *Mitteilungen der geographischen Gesellschaft in Hamburg*, 27, 119~151.
- 27) Passarge, S. (1913): 前掲 26), 122~124.
- 28) Hettner, A. (1923): Methodische Zeit- und Streitfragen. *Geographische Zeitschrift*, 29, p. 49.
- 29) Passarge, G. (1924): *Vergleichende Landschaftskunde* (Heft 4). Berlin, p. V.
- 30) Passarge, G. (1933): *Einführung in die Landschaftskunde*. Leipzig/Berlin, p. 1.
- 31) 前掲 30), p. 1.
- 32) Passarge, G. (1913): 前掲 26), p. 124.
- 33) 前掲 5), p. 133.
- 34) 佐藤 弘 (1936): エヴァルト・パンゼの地理学理論. 地理学, 4, 365~372, 572~576.
- 35) Banse, E. (1912): Geographie. *Petermanns Mitteilungen*, 58, 1~4, 69~74, 128~131.
Banse, E. (1928): *Landschaft und Seele*. München/Berlin.
Banse, E. (1933): Landschaft und Volkheit als Kernbegriff der Geographie. *Geographischer Anzeiger*, 34, 213~218.
- 36) Banse, E. (1912): 前掲 35), p. 1.
- 37) Banse, E. (1923): Landschaft. in *Ewald Banse's Lexikon der Geographie* (Band II). Braunschweig/Hamburg, p. 10.
- 38) Banse, E. (1925): Die Landschaft. *Die Neue Geographie*, 4, p. 33.
なお、パンゼのラントシャフト概念については、
前掲 20), 129~131を参照した。
- 39) Banse, E. (1932): *Geographische Landschaftskunde — Versuch einer Ausdrucks- und Stilwissenschaft der Erdhülle —*. Gotha, p. 24.
- 40) Banse, E. (1912): 前掲 35), 69~72.
Banse, E. (1953): *Entwicklung und Aufgabe der Geographie*. Stuttgart/Wien, 150~207.
- 41) Banse, E. (1912): 前掲 35), p. 72.
- 42) Hassinger, H. (1937): Die Landschaft als Forschungsgegenstand. in *Geographisches Taschenbuch* (1951/52), 369~370.
- 43) 文化景観研究の展開とシュリユーターの役割については次の文献に詳しい。
水津一朗 (1967): 形態と発生, 木内・西川編『地理学総論』, 朝倉書店, 115~140.
シュリユーターの地理学理論は、第2次世界大戦前の日本でも注目を集め、その主要論文の翻訳が、不十分なものながらも試みられた。
国松久彌『人文地理学と文化景観』, 1930年, 共立社。
綿貫勇彦『地理学方法論』, 1935年, 地人書館。
- 44) Schlüter, O. (1920): Die Erdkunde in ihrem Verhältnis zu den Natur- und Geisteswissenschaften. *Geographischer Anzeiger*, 21, 151~152.
- 45) 前掲 44), p. 213.
- 46) Schlüter, O. (1899): Bemerkungen zur Siedlungsgeographie. *Geographische Zeitschrift*, 5, p. 67.
- 47) Schlüter, O. (1906): *Die Ziele der Geographie des Menschen*. München/Berlin, p. 28.
- 48) Krebs, N. (1923): Natur und Kulturlandschaft. *Zeitschrift der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin*, [1923], 81~94.
- 49) Maull, O. (1932): *Geographie der Kulturlandschaft*. Berlin/Leipzig, 7~14.
- 50) 前掲 17), p. 128.
- 51) 前掲 5), p. 129.
- 52) グラネの地理学理論とラントシャフト概念については、シュラムケ (1975) が整理を試みている。
Schramke, W. (1975): 前掲 23), 43~67.
- 53) Schramke, W. (1975): 前掲 23), p. 43.
- 54) Granö, J.G. (1929): *Reine Geographie*. Helsinki, 16~24.
- 55) Granö, J.G. (1935): Geographische Ganzheiten. *Petermanns Mitteilungen*, 81, p. 298.

- 56) Schlüter, O. (1928) : Die analytische Geographie der Kulturlandschaft. *Zeitschrift der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin*, Sonderband 1928, p. 392.
- 57) Hettner, A. (1919) : *Die Einheit der Geographie in Wissenschaft und Unterricht*. Berlin, p. 12.
- 58) 前掲 17), 129~130.
- 59) Waibel, L. (1933) : Was verstehen wir unter Landschaftskunde? *Geographischer Anzeiger*, 34, 197~207.
- 60) Bürger, K. (1935) : 前掲 3).
- 61) 前掲 5), p. 138.
- 62) Bürger, K. (1935) : 前掲 3), p. 29.
- 63) *Comptes rendus du Congrès International de Géographie*. Amsterdam, 1938, Tome 1, 477~485.
- Krebs, N. (1938) : Question —Le concept paysage dans la géographie humaine. *Comptes rendus du Congrès International de Géographie*. Amsterdam, Tome 2 (Rapports), 207~213.
- 64) Paffen, K. (1973) : Einleitung. in Paffen, K. [ed] : *Das Wesen der Landschaft*. Darmstadt, p. XII.
- 65) 前掲 64), p. XII.
- 66) Schmithüsen, J. (1963) : Der wissenschaftliche Landschaftsbegriff. *Mitteilungen der Floristisch-soziologischen Arbeitsgemeinschaft* (Neue Folge), Heft 10, 9~19. (次の論文集中に再録されている. Schmithüsen, J. (1974) : *Landschaft und Vegetation*. Saarbrücken. 引用箇所は p. 480)
- 67) Wernli, O. (1958) : Die neuere Entwicklung des Landschaftsbegriffes. *Geographica Helvetica*, 13, 1~59.
- 68) Storkebaum, W. [ed] (1967) : *Zum Gegenstand und zur Methode der Geographie*. Darmstadt.
- 69) 前掲 64).
- 70) 西川 治(1961) : 地域科学序説. 東京大学教養学部紀要「比較文化研究」, 2, 13~55.
西川 治(1967) : 地域概念と地域学考察. 木内・西川編『地理学総論』, 朝倉書店, 62~98.
- 71) たとえば, 西川 治(1967) : 前掲 70), p. 67.
- 72) Siebert, A. (1955) : 前掲 7), 2~3.
- 73) Troll, K. (1950) : Die geographische Landschaft und ihre Erforschung. *Studium Generale*, 3, p. 165.
- 74) Bobek, H. und Schmithüsen, J. (1949) : Die Landschaft im logischen System der Geographie. *Erdkunde*, 3, 112~120.
- 75) 前掲 74), p. 119.
- 76) 前掲 74), p. 112.
- 77) たとえば, Schmithüsen, J. (1964) : *Was ist eine Landschaft*. Wiesbaden, p. 11.
- 78) 前掲 77), p. 13.
- 79) この点に関するドイツでの研究例は, 野間三郎により紹介されている.
野間三郎他 (1974) : 「地域のシステム」に関する諸外国の研究——その展望. 地学雑誌, 83, 103~108.
- 80) 前掲 74), p. 113.
- 81) Bobek, H. (1957) : Gedanken über das logische System der Geographie. *Mitteilungen der Geographischen Gesellschaft Wien*, 99, p. 139.
- 82) *Comptes rendus du Congrès International de Géographie*. Amsterdam, 1938, Tome 1, p. 480.
- 83) Lautensach, H. (1952) : Otto Schlüters Bedeutung für die methodische Entwicklung der Geographie. *Petermanns Geographische Mitteilungen*, 96, p. 227.
- 84) ラウテンザッハは, 地理的事象の推移系列に関する彼の考察を, 類型的なラントシャフト把握の試みとして性格づけている.
Lautensach, H. (1952) : *Der geographische Formenwandel — Studien zur Landschaftssystematik*—. Bonn.
- 85) Dickinson, R. E. (1938) : Die gegenwärtigen Strömungen der britischen Geographie. *Geographische Zeitschrift*, 44, p. 264.
- 86) この点については, 前掲 20), 242~250で詳しく触れられている.
- 87) Uhlig, H. (1956) : *Die Kulturlandschaft — Methoden der Forschung und das Beispiel Nordostengland*—. Köln, 87~98.
- 88) 前掲 87), p. 90.
- 89) 前掲 87), p. 90.
Müller-Wille, W. (1952) : *Westfalen — Landschaftliche Ordnung und Bindung eines Landes*—. Münster.
- 90) Uhlig, H. (1970) : Landschaft. in *Westermann Lexikon der Geographie*, Band III, p. 34.

- 91) 前掲 67).
- 92) Brunner, H. R. (1981): Die Zürcher Landschaftsschule. *Geographica Helvetica*, **36**, 146~148.
- 93) Carol, H. (1956): Zur Diskussion um Landschaft und Geographie. *Geographica Helvetica*, **11**, 127~128.
- 94) Carol, H. (1957): Grundsätzliches zum Landschaftsbegriff. *Petermanns Geographische Mitteilungen*, **101**, p. 93.
- 95) 前掲 67), p. 37.
- 96) 前掲 93), p. 114.
- 97) 前掲 93), p. 122.
- 98) 前掲 93), p. 113.
- 99) 前掲 92), p. 148.
- 100) 前掲 20), 251~259.
- 101) Neef, E. (1967): *Die theoretischen Grundlagen der Landschaftslehre*. Gotha/Leipzig.
 なお、ドイツ地理学におけるネーフの役割については、次の文献に詳説されている。
 Leser, H. (1985): Ernst Neef und die landschaftsökologische Forschung. *Die Erde*, **116**, 1~6.
- 102) 次の論文集に、関連する論考の多くが再録されている。
 Winkler, E. (1977): *Der Geograph und die Landschaft*. Zürich.
- 103) Lehmann, H. (1950): Die Physiognomie der Landschaft. *Studium Generale*, **3**, 182~195.
- 104) Schwind, M. (1950): Sinn und Ausdruck der Landschaft. *Studium Generale*, **3**, 196~201.
 Schwind, M. (1951): Kulturlandschaft als objektiver Geist. *Deutsche Geographische Blätter*, **46**, 5~28.
- 105) この時期のラントシャフト論を幅広く展望したものとしては、前掲 64), IX~XXIIIがある。
- 106) Hart, J.F. (1982): The highest form of the geographer's art. *Ann. Ass. Am. Geogr.*, **72**, p. 12.
- 107) 前掲 2), p. 62.
- 108) Bartels, D. (1968): Die Zukunft der Geographie als Problem ihrer Standortbestimmung. *Geographische Zeitschrift*, **56**, p. 140.
- 109) Burgard, G. et al. (1970): Bestandsaufnahme zur Situation der deutschen Schul- und Hochschulgeographie. in *Tagungsbericht und Wissenschaftliche Abhandlungen* (Deutscher Geographentag Kiel, 1969), p. 199.
- 110) Neef, E. (1977): „Destructive Geographie“ — Einige notwendige Bemerkungen zu G. Hard: „Die Geographie“ —. *Petermanns Geographische Mitteilungen*, **121**, 138~140.
 ちなみに、わが国でも、水津 (1982) がハルト批判を試みている。
 水津一朗『地域の構造』, 1982年, 大明堂, 56~60.
- 111) Hard, G. (1970): 前掲 3), p. 24.
- 112) Hard, G. (1973): *Die Geographie — Eine wissenschaftstheoretische Einführung* —. Berlin/New York, 177~178.
- 113) 前掲 64).
- 114) 前掲 5).
- 115) ハルト (1969) は、書籍や論文のタイトルにあらわれたラントシャフトという言葉の頻度に基づいて、一般的関心の高まりと地理学における関心の位相がずれていること、1950年代にラントシャフトという言葉に対して示された地理学的関心のピークが、地理学以外の分野ではみられなかったことを指摘した。
 Hard, G. (1969): Die Diffusion der „Idee der Landschaft“ — Präliminarien zu einer Geschichte der Landschaftsgeographie —. *Erdkunde*, **23**, p. 259.
 また、バルテルス (1968) は、「『ラントシャフト』という言葉は、地理学以外の分野で、今日では学術用語としてほとんど何の役割も演じていない」と述べた。
 前掲 2), p. 58.
- 116) Dörrenhaus, F. (1971): Geographie ohne Landschaft? — Zu einem Aufsatz von Gerhard Hard —. *Geographische Zeitschrift*, **59**, 101~116.
- 117) 前掲 64), XV~XM.
- 118) Weichhart, P. (1975): *Geographie im Umbruch — Ein methodologischer Beitrag zur Neukonzeption der Komplexen Geographie* —. Wien, p. 133.
- 119) Hard, G. (1975): Von der Landschafts- zur Ökogeographie — Zu den methodologischen Überlegungen von Peter WEICHHART —. *Mitteilungen der Österreichischen Geographischen*

- Gesellschaft*, 117, 274~286.
- 120) この点については、次の文献が参考になろう。
- Leser, H. (1978) : *Landschaftsökologie*. Stuttgart, (第2版).
- Haase, G. und Richter, H. (1983) : Current trends in landscape research. *Geo Journal*, 7, 107~119.
- 121) パッサルゲ (1923) と同一のタイトルを掲げた著作の刊行も、このような傾向の一端を示しているように思われる。
- Müller-Hohenstein, K. (1979) : *Die Landschaftsgürtel der Erde*. Stuttgart.
- 122) 今世紀のドイツ地理学に関する思想史的展望としては、前掲 20) の他に、次の文献があげられる。
- Kuls, W. (1970) : Über einige Entwicklungstendenzen in der geographischen Wissenschaft seit der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts. *Mitteilungen der Geographischen Gesellschaft in München*, 55, 11~30.
- Overbeck, H. (1954) : Die Entwicklung der Anthropogeographie (insbesondere in Deutschland) seit der Jahrhundertwende und ihre Bedeutung für die geschichtliche Landesforschung. *Blätter für deutsche Landesgeschichte*, 91, 182~244. [主要部分は以下に再録されている。Overbeck, H. (1965) : *Kulturlandschaftsforschung und Landeskunde — Ausgewählte, überwiegend methodische Arbeiten*—. Heidelberg, 21~39 und 278~291]
- Schwarz, G. (1948) : *Die Entwicklung der geographischen Wissenschaft seit dem 18. Jahrhundert*. Berlin.
- 123) Kuls, W. (1970) : 前掲 122), p. 12.
- 124) Bahrenberg, G. (1979) : Von der Anthropogeographie zur Regionalforschung — eine Zwischenbilanz—. *Osnabrücker Studien zur Geographie*, 2, p. 64.

The Concept of *Landschaft* in German Geography

Akira TEZUKA

The concept of *Landschaft* has been invariably one of main theoretical themes in German geography of the twentieth century. With the term of *Landschaft*, many leading geographers presented the central ideas of their geographical theories. In various streams of German geographical thoughts, *Landschaft* has played a more or less important role as a keyword indicating the essential character of each school. The multivocal nature of the term *Landschaft* had been already observed in the late nineteenth century when geography made rapid progress as an academic discipline, while the terminology of *Landschaft* has been always confusing in the twentieth century. But, on the other hand, one can not deny the fact that the *Landschaft* idea has gradually changed its emphasizing points with the evolution of German geographical thoughts.

In the period of the 1920's and the 1930's, there were heated discussions about the nature of geography. The idea of *Landschaft* played a central role in many cases of these discussions. Firstly, we must remember the name of Passarge with his *Landschaftskunde*. While Passarge's *Landschaftskunde* attracted public attention and had many adherents, it was severely criticized in the academic circles of geography. E. Banse, who advocated actively his *Neue Geographie* in the early 1920's, also utilized the word of *Landschaft* as representing a central concept of his geographical methodology. Furthermore, Hettner and Schlüter, who dominated methodological discussions in the first half of the twentieth century, had much to do with the discussions about *Landschaft*. Schlüter emphasized the scientific research of *Kulturlandschaft*

as a principal domain of human geography. On the contrary, Hettner insisted that *Landschaftskunde* and *Landschaftsgeographie* were nothing but traditional *Länderkunde*.

The theoretical examination of *Landschaft* idea has been continuously an important theme of geographical discussions in postwar West Germany. Particularly in the 1950's, problems about *Landschaft* were actively discussed as a very core of geography. Paffen (1973) pointed out that, while discussions in the second half of the 1930's (including K. Bürger's contribution) were the first important step to bring the precision of *Landschaft* idea, this postwar period represented the second and decisive step to solve the confusion of this concept. Methodological debates about *Landschaft* reached the climax in the second half of the 1950's and the first half of the 1960's, giving rise to the agreement of many German geographers about the content of *Landschaft* idea.

Severe attacks against traditional geography around 1970 radically changed the situation. The very core of this challenge, which was apparently worthy to be described as an epistemological rupture, was a rejection of *Landschaft* idea and *Länderkunde*, namely a refusal of the concept of regional synthesis. But, on the other hand, the idea of geographical *Landschaft* has been repeatedly emphasized, even after the 1970's, as a basic concept about the nature of geography, whether the word of *Landschaft* was then used or not. We must not, therefore, overlook the fact that the idea of *Landschaft* actively developed around the 1950's remains an important key concept in geographical theories in present-day German geography.